
笑わ莊

いいくに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑わ荘

【Nコード】

N5013H

【作者名】

いいくに

【あらすじ】

主人公「片瀬遙」が引越してきた「笑わ荘」―――ちよくちよくドジする主人公「片瀬遙」―――明るく常にマイペース「青空夏美」―――のんびりすぎる夏美の彼氏「高岡健太」―――引きこもり気味の元ギタリスト「小暮浩二」―――男勝りな高校生「川下佑香」―――売れっ子目指す女芸人「相沢ちか」―――無表情な氷姫「浜崎七奈」そんな仲間達が繰り広げるスロウライフ

第零笑 引っ越しー食い逃げー700円

オレは、東北から東京に上京してきた。

大学に入るために。

しかし、入学するはずだった大学が、何かしらの不祥事で廃校になってしまった。

何らかの不祥事、何があったんだろう、よく分かんないけど……

「いや〜どうしよう」

オレは、東京駅で悩んでいた。

大学が廃校になったので東京にくる意味はなかったけど、カッコつけてきてしまった…

今ものすごい後悔してる……

とりあえずアパートに向かうか……

オレは大学に受かってからすぐに、東京に住家を探した。
そして、ちよつとボロイ格安アパートを見つけた。

そのアパートがオレの目の前にある

‘笑わ荘’

だ。

ちよつとふざけた名前だが、安さいからいいか…

（ドンドン）

「大家さんいますか？」

（ガチャ）

一人の大きい女性が出てきた。

「私が大家ですけど…」

若い大家だな、20代くらいだな、

「あのどうかしましたか？」

「あつすいません

ちよつと考え事してしました」

大家さんは不思議そうな顔をした。

「で、なんですか？」

「今日からお世話になります

『片瀬 遥』

と言います」

「あゝはいはい

ちよつと待ってください」

そう言っていると大家さんは部屋に入った。

（ガチャガチャ）

なんかを探してるようだ。

「おまたせ」

そう言っているとオレに鍵を渡してきた。

「あつども」

「204号室だから二階の左側の奥から二番目」

「あつはい…」

これからヨロシクお願いします」

なんかオレが住むってわかってから、態度変ったな」

204……………204……………204……………あつたあつた。

この部屋ね」

なんかオバケでそんなカンジ……………

「うらめしや〜〜〜」

肩をつかまれた

「きゃあああああ!!」

思わず悲鳴をあげてしまった。

「あははは!!」

きゃあ

だって!!」

後ろで爆笑してる女。

「笑わないでください」

たぶんオレの顔は真っ赤だろう。

「ゴメンゴメン

あんた今日越してきたの?」

涙を拭いながら聞いてくる。

「そうですけど…」

初対面なのにグイグイくるな。

「へへ何号室?」

「ここです」

と言いながら204号室を指差す

「じゃあお向かいさんだ」

「そうなんですか……」

「それだけ？」

他になんて答えればよかったんだろう…

「こんな美女の向かいに住めるのに、嬉しくないの？」

「そんな初対面ですし…」

なんか苦手かも…この人……

「まあ私を落とそうなんて考えないことね」

落とそうなんて気は、さらさらない。

「なぜなら私には彼氏がいるから」

「あつそうなんですか…」

「きみ反応薄いな」

なんて答えりゃいんだよ…

「すみません…」

「まあいいや」

ところでさ、名前聞いてなかったね？」

「オレは、片瀬 遙 っています」

「なんか女の子っぽい名前ね」

「よくいわれます…」

「私は 青空 夏美

なっちゃん って呼んでね」

何か呼びづらいな…

「んじゃーオレ荷物の整理とかありますんで…」

「あらそう…また今度ね」

手を振ってくる青空さん

「さよなら」

オレは、そう言って扉をしめた。

騒がしい人だったな

部屋の中は、段ボールだらけで寝る場所すらない。
片付けんのめんどくせーな

(ドンドン)

オレの部屋を誰かがノックした。

誰だろう？

青空さんかな…

「はい」

ドアを開けると

目の前には大家さんが立っていた。

「ごめんね、これ渡してなかった」

と言って封筒を渡してきた。

「なんですか…これ…？」

けっこう分厚いな。

「うちのルールとか、住民表とか、色々入ってるから読み終わった
ら返して」

「わかりました」

「んじゃ」

大家さんは帰っていった

とりあえず片付けるか……

一時間後

「疲れた〜」

なんとか半分は片付け終わった。

後は細かいのだけか…

冷蔵庫とかも一人でやったし、誰かに手伝ってもらえばよかった…

(ぐう~~~~)

腹減ったな…飯食いにいくか……

オレは、アパートのアパートの近くにあるラーメン屋に行った。

「味噌ラーメン一つ」

「はいよ

ラーメン二丁」

五分くらいするとラーメンがきた。

ラーメンを食べてると、暑くなって着ていた上着を脱いだ。

それで気がついた……………

財布がねえ!!

どうしよう……………

食い逃げ…

ダメだろ…

ヤベ〜…………

とりあえず食べよう。

食べ終わった…

よしトイレに、逃げよう…

トイレに入ったが何も変わるわけなく…

どしよかつな〜

財布なし…ポケットに小銭もなし…万事休すか……

謝ろう

オレはトイレから出てレジに向かった。

「すみません」

「はいお会計七百円になります」

「すみません財布忘れまして…」

「……………」

いやな沈黙が流れる…

「お客さん食い逃げってことですか？」

「いや、すぐに取りってきます」

「そんなの信じられるか！！」

警察呼ぶから、ちよつとこいー！！」

ヤバイ……

「お願いします絶対帰ってきますから」

「信じれないって」

もうダメか…

「私が立て替えます」

声した方をみると、中学生くらいの身長の子がたっていた。

「気持ちはいがたいけど中学生に金借りるわけにはいかないよ…」

「あたし大学生ですけど…」

「うそ！！ゴメン」

「立て替えなくていいんですね
それじゃ」

「ゴメン！

ごめんなさい！！

すいませんでした！！

立て替えてください！！！」

「はい七百円」

「ありがとうございます」

オレにお金を渡すと、どこかに行ってしまった…

「ありがとうございます」

ラーメン屋から出てさっきの子を探したがいなかった。

ちゃんとお礼したかったな

アパートにつくと、もう八時だった…

ラーメン屋に長く居過ぎたな…

今日はもう寝よ。

七百円どうやって返そう…

そんなことを考えてると、意識がドンドン遠くなっていった…

朝起きると十一時だった。

寝過ぎちゃったな〜

そついやまだ封筒の中見てなかったな…

封筒を開けて中をチェックすると、ルールブックと書かれた分厚い本と住民表と書かれた紙があった。

ルールブック分厚いな〜

まあ読んでみるか…

ルール第一条

引っ越してきたらまず挨拶

第二条

行事に絶対参加

第三条

迷惑かけない

としか書かれてない。

残りのページはアルバムみたいに写真がたくさん貼られていた。

迷惑かけないって大雑把だな…

住民表には部屋に住んでる人の名前と何号室に住んでるかが書かれていた。

一階は……………

大家さんだけだ…

二階には……

オレをいれても

七人だけど六部屋

青空さんと高岡って人同棲してんだ。

挨拶行くかな？

オレはタオルをもって部屋をでた。

とりあえず青空さんのところから行こう

(ドンドン)

「青空さんいますか?」

(ガチャ)

「ん?」

出てきたのは、男の人だった…

「夏美なら今いないけど…なんかよう?」

「あ…いや…昨日引っ越してきた

片瀬 遥

です これつまらないものですがどうぞ

「あ…ども

オレは

高岡 健太

よろしくな」

「よろしくおねがいします

それでは失礼しました」

「じゃあな」

(ボタン)

フレンドリーな人だった。

ちよっと夏美さんに似てるかも…

201号室から行くか…

(ドンドン)

「すいません

誰かいませんか」

「いませ〜ん」

声がするのにないわけないだろ…

「いるんでしょ〜」

「謝金取りはお帰りください」

「違います

オレは昨日引っ越してきた

片瀬 遥

です」

「あっそうオレは

小暮 浩二

よろしく」

「あの〜渡したいモノがあるんですけど」

「そこに置いて
それじゃ」

小暮さんは、顔すら見せるてくれなかった。

部屋順はこんなカンジだった。

201 高岡健太（男）青空夏美（女）

202 小暮浩二（男）

203 川下佑香（女）

204 オレ（男）

205 ?（?）

206 相沢ちか（女）

205号室の人は、いなかったか……

夜にもう一回行ってみるか…

腹減ったな

ラーメン屋行くか…

今度はちゃんと財布もったし。

ラーメン屋につくと、財布があるか確認してしまった。

この前のことは、トラウマかな……………

「味噌ラーメン一つ」

「はいよ〜財布はありますか？」

店員に小馬鹿にしたように言われて腹が立った。

「ありますよ」

「はいよ〜ラーメン一丁」

五分後

ラーメンがきた。

食べ終わって、財布の中をみると、金が入ってなかった……………

またか……………

「あら遙ちゃ〜ん」

声した方をみると

「青空さん」

「偶然ね〜」

「一人ですか？」

「そうだけど…なに？」

「あの…言いにくいんですけど……」

「なによ？」

不思議な顔して聞いてくる。

「お金を貸してください」

「は？なんで？」

「財布はあるんですけど……はいつてないんですお金が」

「あんたドジね
いくら？」

「七百円……」

「はい」

「ありがとうございます」

オレはお金を払って、すぐアパートに帰った。

家についたら、すぐに寝てしまった。

大家さんから、預かった封筒を返すのを忘れて……

第零笑 引っ越しー食い逃げー700円（後書き）

アドバイス等をお待ちしています。

第一笑 返し忘れー悲鳴ー返金

引っ越して一週間がたった。

未だに205号室の人にはまだ会ったことない……

今日こそは挨拶したいな。

(ドンドン)

「こんにちは」

返事はない。

今日もいないな

「遙ちゃん何してんの？」

青空さんだ。

「この部屋の人に挨拶しようと思って……」

「ああー七奈ちゃんね………また居留守か………」

「なんか言いました？」

「んー何にも」

なんか隠してるな……

「どうすればこの部屋の人に会えるんですか？」

「頑張れば会えんじゃない」

頑張ればね……

「まあ、頑張るな」

手を振りながらどこかに行ってしまった。
まあなんとかなるか……

夕方

オレはまたラーメン屋にきていた。

「お会計700円になります」

700円払ってラーメン屋をでた。

二回も金持たずにきたんだよね

女の子と青空さんに助けられたんだよね

「あつ金返してねえや」

アパートついたら返そう。

アパートにつくと、オレの部屋の前に大家さんがたっていた。

「返せ!!」

いきなり強く言われてビックリした。

「お金借りてましたっけ？」

「金じゃねえよ!!」

大家さんかなり怒ってんな…

「なに借りましたっけ？」

「封筒のやつ!!」

「あっはい!! 持ってきます」

オレは急いで部屋にはいった。

「これですか？」

大家さんは中をみて

「これだよ

怒鳴ってゴメンね」

「いえ〜こちらこそ遅れてすいません」

(ボタン)

「ビックリした〜

そんなに大事なもんなのかな〜」

そんなことを考えながら玄関でブーツとしてた。

気付いたら九時半だった。

こんな時間か…

飯作んなきゃな

「きゃああああ〜!!」

外から声がした。

急いで出てみると…

青空さんがしゃがんでた。

「どうしたんですか？」

オレが聞くと小さい声で

「……………虫……………」

そんなことかよ…………

っと思いつきながら周りをみてみると皆出てきていた。

小暮さんも出てきたんだ。

ん？……………205号室の人は出てきていなかった……………

「青空さん質問していいですか？」

「205号室の人は、今部屋にいないんですか？」

「えっ九時すぎてるからいると思うよ」

「そうですか…」

いるのか……

「夏美さん虫がどうしたって？」

小暮が聞く

「目の前にきたもんだから……つい……」

「夏美さん虫くらいで……」

「なっちゃんはもうしゃ～ないな～」

「しっかりしてくださいよ」

「夏美戻るぞ」

次から次に部屋に戻って行く。

(ドンドン)

「こんばんは～誰かいませんか？」

(……………)

返事なしですか……

もういいや戻ってまた明日だ…

（ガチャ）

「あの…青空さんどうかしたんですか？」

後ろから声が聞こえた。

「いやゝ虫にビックリし……」

後ろを向きながら言うと……

「700円の……」

オレは途中で止まってしまった。

「ラーメン屋の……」

相手も止まっていた。

「あのゝこれ返します
700円」

「あ…ありがとうございます」

ものすごいカタコト…

「それじゃ」

ドアをしめようとする七奈。

「ちょっと待って」

「なん…で…すか？」

オレは急いで部屋に入りあるモノを持ってきた。

「これつまらないものですけど…」

「あ…ども」

「オレこの前引っ越してきた片瀬遥っていいですよしく」

「私は山田七奈
よろしく」

オレは探してた女の子と会えなかった隣人にやっと会えた…。

なんか疲れたな
もう寝よ…

第二笑 金欠ーバイトー関西娘

五月中旬

オレはあることに気がついた…

金がそこをついた………

オレは外をブラリと歩いていた。

金欠かゝ引越してから忙しくてバイトしてなかったもんなゝ
バイト探さなきゃな………

ボーツと歩いてると

‘バイト募集中’

の貼紙を見つけた。

ラッキーー！！ちよとどよかったゝ善は急げ連絡しよつて……あの
ラーメン屋じゃん………

相沢ちか視点

ダルいなゝバイトゝ早く売れな稼がれへんかゝ

（ウィーン）

「あつ…いつらしゃいませ〜」

「あの〜バイト募集の紙みてきたんですけど………もしかして
…相沢さん？」

「お〜遙や〜ん

後さん付けはやめろ！！気持ち悪い」

「…すいません…」

謝るんかい…話にくいタイプやわ〜

「バイトにきたん？」

「はい…」

こいつも大変やな〜

「ちょい待ち

店長読んでくる」

店長と遙はお話中…

店の中にはお客なし…

ヒマや〜ものすごくヒマや〜

「それじゃ今日からいきなりだけど頼むよ」

「はい……」

「んじゃ〜ちか君
新人君を頼むよ」

「はい〜」

店長は奥の事務室に消えてった。

遙と二人きり……正直気まずい……

「相沢さんって……」

「さん付けやめろ」

「……相沢って」

「ちかでいい」

「……ちかって何やってんの？」

恥ずかしそうに聞く遙

女呼び捨てしたくらいで顔真っ赤かい……なんかあきれるで……

「みりゃわかるやんラーメン屋」

「そうじゃなくて本業っーのかな」

「ラーメン屋が本業やって」

あたしは嘘をついてみた。
特に意味はない。なんかつきたかった……

「嘘はつかないですよ」

あたしはビックリしたこんなノロマに嘘ついたのを指摘されたことに……

「なんで嘘だと思っただの？」

あたしは心に浮かんだこと聞いた。

「なんか…輝くもんっーか、そんなもんがあるからさーもっとデカいもんだと思っただの…」

「カンってことか…」

「まあそうですね」

遙は小さく笑いながら答えた。

「で何やってるんですか？」

「ひ・み・つ」

「教える気ないんですね」

「そゆうことかな」

こいつなんか……おもしろい……

遥視点

ちかと初めてちゃんと話したな

「なんで遥は東京にきたん？」

「ん…はいなんですか？」

いきなり話しかけられてビックリした

「だからなんで東京にきたん？」

「いや、こっちの大学に行く予定だったんですけど大学なくなっちゃって…」

軽く笑いながら答えた。

「一言で言うとドンマイやな」

「そうですね」

客が来ないまま二時間近く過ぎた…

「ほなあたし上がるわ
んじゃね」

「あっはい
お疲れさまでした」

着替えて直ぐに出て行った。

ちかさん本当は何やってんだろ？

オレは三時間くらい店のカウンターにいたが、客は一人も来なかった。

オレもそろそろ上がる時間か…

（ガラガラ）

客がきた…なんかうれしいな…

「いつらしゃいませ」

「遥ちゃんバイト始めたんだ」

青空さんだ…

「んじゃ〜醤油ラーメン一つ」

「はいよ〜

醤油一丁」

「……………」

厨房から声が聞こえてこない…

中をのぞいてみると

「グー…グー…」

寝ていた…誰がつくんだよ……オレか……

「はいお待ち」

「いただきます」

ラーメンうまくていればいいけど…

「遥ちゃん!!」

まずかったか……

「美味しいね」

「……ありがとうございます
うまくてよかったです」

「別に遥ちゃんが作った訳じゃないでしょ？」

「店側として……ね……」

「ふん」

あぶなかった〜オレが作ったって知らないんだ…

「ところで青空さん？」

「何？」

「さん付けされると気持ち悪いですか？」

「……ちかちゃんに言われたんでしょ」

「何でわかったんですか？」

「私も言われたから、気楽に話しかけていいよってこと何だろうけど……口じゃうまく言えないんだろうからね」

「ちかって優しいんですね」

「ちかちゃんのこと……ちかって呼び捨てにしたの？本人の前で？」

「はいそうしろって言われましたから」

「……ちかちゃんに気に入られたんだ……」

「なんか言いました？」

「なんも」

「んじゃ会計いくら？」

「700円です」

「んじゃおごつといて、この前貸したでしょ、バイバイ」

（ガラガラ）

そう言って店を出てった。

オレも上がるかな。

「店長オレ上がりますよ」

「……」

店長は起きてるけど喋らない。

「どうしたんですか？」

「…お前がラーメン作ったのか？」

ヤバかったか

「すみません皆さん寝てたもんで…」

「お前明日から厨房入れ」

「えっ…？」

「明日から厨房入れ！！わかったな！！」

「はい！！」

「んじゃ帰れ」

「はい!!」

オレは着替えずにサッサッと出て行った。

着替えんの忘れてた…

店長いきなり大きな声だすもんだから…
いいや明日とろう…

ヒマだな〜テレビでもみよかつな〜

『もういいよ

どうもありがとうございます』

女芸人が………ちょっとかわいいな………んっ!?

この人みたことある?気がする………

ん〜まっいつか…

(ドンドン)

誰かきた…

「はい」

(ガチャ)

「よ〜」

「相沢さ…」

「さん付け!!」

「ちかじゃん
どうした？」

「店長がこれ」

忘れてた服だ。

「ありがとう」

「あんたラーメンうまかったらしいやん
作ってゝな」

「材料もないし無理だよ」

「じゃじゃ〜ん持ってきました」

「……………しょ〜がないな…とりあえずあがって」

「お邪魔しま〜す」

『残念三点差』

「…お笑い好きなん？」

「いや〜たまたま見てただけ」

「あつそう」

「はいお茶」

「おおきに」

「……………」

沈黙だ…話ことないし気まずい……

『さあ点数がでます』

これでもいいやとりあえず話そう。

「このコンビニの右側の方見たことない？」

オレは関西出身だしベストな話題だ思ってた。

「ないな…やっぱ帰るわ」

さっきまでと全然態度が違う。
スゴく暗い雰囲気だ。

「なんで？ラーメンも食ってかないの？」

「いいわ

んじゃ帰らせてもらっわ」

どうしたんだろ？オレ変なこと言ったかな？

「待つてよ

オレなんか悪いことした？」

「なんにもほんじゃな」

そのまま出てってしまった。

微かに泣いてたような気もした……

第三笑 気まずいー芸人ー服忘れ

一週間が過ぎた。

あのことが頭から離れない…
ちかとは全然話してない……

なにかいけないことしただろうか…
ちか視点

一週間が過ぎた。

あかんわ…なんであんなに似てんのやろ……

……あたしが死なせたんやな……

「味噌一丁と醤油一丁」

「はいよ」

オレとちかが会話するのは仕事場のときのこれだけだ。

「はあ……」

「溜め息かい？
何したんで」

店長か……

「いや、ちょっと考えごとしてて」

「そうかい…まあ頑張りすぎんなよ」

「はい…ありがとうございます」

「んじゃ早くラーメン作れ」

「はい…」

ちよつと気が軽くなった…

「んじゃ店長あたし上がりますから」

「へ、いいお疲れ」

早々とちかは帰った。

「あの子も頑張ってるな」

店長が呟いた。

「店長ちかつて何やってんですか？」

「ああ？あの子はな……」

『本日のお客さま、なかなか、のお二人です』

「ちょうどテレビに出てんじゃねえか」

あいつは芸人なんだ」

だから部屋にきたときお笑い好きか聞いたのか…

「…スゴいつすね」

「スゲーよな

あつオレ今日用事があんだよ
だからもう店しめるぞ」

「はい」

オレはすぐにちかの部屋に向かった。

アパートの目の前に来て気がついた……………

また服着替えんの忘れた……………

まあいつか…

こっちが先だ。

第四笑　兄ちゃん？ー兄ちゃん！？ー兄ちゃん！ー！

（ドンドン）

「ちかいる？遙だけど」

「……」

いないのか…

まあ部屋の前で待ってればくるだろ。

【一時間後】

こねえな

【二時間後】

おせえな

ちか視点

【三時間後】

「グウーグウー」

なんであたしんちの前で寝てんねん……この男…
にしても似過ぎやろ……

「起きんかい!!」

蹴りを入れた。

「んあゝちかじゃん
なんでオレここにいんの？」

「シラン」

それはアタシが聞きたいわ

「そうだちか話しあんだけど…」

嫌な予感がする……

「ちかつて芸……」

「んじゃな……」

アタシは部屋に入ってドアをしめた。

「ちよっ開けてよ!!」

無視しよ…

「開けてよ!!」

無視……

「開けなきゃ近所に迷惑かけるくらい大きな声だすぞ!!」

もう十分迷惑なくらいの声やちゅーねん…

「開けてよ!!!」

ホンマにうるさいわ。

「さっきからうるさい!!」

「いや佑香ちゃん違うんだって」

「言い訳は聞かない」

(ドカツ!!)

佑香にやられたか……

これで静かにな……

「開けて!!!!!!」

ならんかった…

「まだやるか!!」

「痛い!!」

ちよつと可哀相だな…

「痛いって!!」

開けるか…

（ガチャ）

「いたたたあー！」

ドアの向こうには…

四の字固めをしてる佑香とされてる遥がいた…

遥視点

「助けてくれてありがとう」

「いやアタシのせいもあるし……」

「なあチ力って芸人なの？」

思い切って聞いた。

「……………」

黙ってうなずいた。

「やっぱり！！あゝスッキリした
じゃ〜ね〜」

オレは帰ろうと立つところに

「待つてよ！兄ちゃん！！」

チカが店の店員服の裾を掴んできた。

「……兄ちゃん………つて？」

「あ……いや……なんでもない」

「あっそう？
んじやな〜」

行こうとしてもなかなか裾を放さない。

「兄ちゃん座りいや」

「兄ちゃんつて？」

「……いいから座れ」

「はい……」

座ったが裾は放してくれなかった

「聞くのがいきなりすぎひん？」

「えっいや……」

「フリがあつてからやん普通
それをいきなり……兄ちゃんは……」

まただ……

「しっかりしてや兄ちゃん」

「ねえさつきから兄ちゃんってどゆこと？」

「か…か…関西では男の人を兄ちゃんゆうねん」

「なんかそのニュアンスとは違ったような気がするけど…」

「ええねん!!」

「はい……」

「……………」

チ力はなんも喋らない。

うるさかったり、静かになったり大変だな…

「なあ……なんでアタシが芸人ってわかったん？」

「テレビ出てたから…」

「……………」

また静かになった。

（ドンドン）

「遙ちゃんチカいる？」

青空さんか…

「いますよ」

「チカちゃんお客さん来てるよ」

「今行く」

（ガチャ）

そのままチカ出て行った
ドア開けてったまま…

ちか視点

誰やろ……

「とりあえずチカちゃんの部屋に入れといたから」

それって問題あるような……

「はい」

（ガチャ）

「ただいま」

「待ってたよ」

……兄ちゃん……

「何でおんの？」

なんで…

「まだ芸人やってんだ」

「いや……」

それは……

「もうやめろよ……」

「いや……」

やだ……

「やめろよ……死んだ奴のために自分捨てることないだろ……」

「いや……」

言わないで……

「悟はもういないんだよ……」

（プッン）

「アタシは……兄ちゃんが……やりたいこと……を……」

なんや……どうでも……いいわ……

「だからって……」

「ええやん!! やりたいようにやらしてゝな!! アタシだって……
兄ちゃんが……」

アタシは気付いたら走ってた。

遥視点

「おっチ力大きい声だしてたけどどうしたの？」

「……」

走りさって行つた……

無視かな…？

「おいチ力!! 待て!!」

彼氏とケンカかな？

「おっきい声したけど何？」

青空さんが聞いて来た。

「いやわかんないすね」

「またお前か！」

さっきもつるさいって言ったでしょ!」

「佑香ちゃん今のはオレじゃない」

「問答無用!!」

襲いかかってくる佑香ちゃん。

「いだだだっ!」

腕ひしぎ十字固め……

「ワン・ツー・スリー」

カウントを数える健太さん。

「健太さん助けて……」

「えゝメンドクサイ」

あっさり断るなよ……

「つるさくしないことね」

そうゆうと十字固めを解いて部屋に戻った。

「で何今の騒ぎ?」

「小暮さん居たんですか?」

「お前がやられる前から居たよ……」

気付かなかった……

「なんで騒いでたの？チカちゃんは？」

「たぶん彼氏と喧嘩だと思います」

「なんだよツマンネ……」

でも何か嫌な予感がする……

午前一時

「うんわかちゃ〜
生活はできてるはんで
へばな〜」

久し振りに母ちゃんと話したな〜

（ドンドン）

「すいませ〜ん」

（ガチャ）

「なんですか？」

「チカいませんか？」

「居ませんね…
何かしたんですか？」

「夕方頃にどっか行っただけで…」

「もう大人なんだし心配するほどのことじゃ…」

「それが電話も出ないし…ちょっとひどいこと言ってしまったもんで…」

「わかりました…探すの手伝います…」

嫌な予感って当たるもんだな…

結局住民全員で探すことになった。

「俺と夏美はラーメン屋の方探すから

小暮と佑香は右の方

遥と七奈は左の方

大家さんと相沢さんはアパートの裏の方を探して」

健太さんっていざという時カッコいいな

普段ものスゴいノロマだけど…

「よし行くぞ」

「チカ」

「チカちゃん」

「相沢」

「チカさん」

「チカ」

「…ちか……………」

「206号室」

「チカ」

どこにもいない…

もしかして…事故……………」

なんでこんな時は嫌なことしか思いつかばない…

ちか視点

ここどこやる？

ええわどこでも…

疲れた…アタシ何してんのやる…

兄ちゃんどうしたらええ？

アタシもうわからへん……

「チカ！！やつと見つけた！」

悟兄ちゃん…？

「さあ行くぞ

ほら乗れ」

悟兄ちゃんの背中暖かい……

なあ悟兄ちゃん？

アタシさ芸人続けていい？

（好きなだけやったらええ

思い切りやって来い!!」)

おおきにな

兄ちゃん……

遥視点

チカどこにいんだよ……

「遥……あそこに誰かしやがんでる……」

「どこ……七奈？」

「そこ」

七奈の指さす方には……

チカがしやがんでた……

「チカ!! やつと見つけた!」

「悟兄ちゃん？」

誰と勘違いしてんだ……? まあいいや

「さあ行くぞ

ほら乗れ」

チカに背中をだす。

「……」

動かないな……

「七奈乗せてくれ」

「うん……」

「じゃあ行くか……」

（ボタン）

七奈がコケた……

「大丈夫か……」

「うん」

こんな時も無表情なのね……

「……兄ちゃんの背中温かい……」

「七奈何か言った？」

「なんにも……」

「じゃ空耳だな……」

「いましたよ」

チ力を連れてくると皆ホツとしてその場に座り込んだ…

「よかった…よかった……」

相沢さんはチ力の手を握って泣いていた。

泣いてる相沢さんに大家さんが

「相沢さんもう遅いですし今日は止まってください」

「ありがとうございます…」

「さあて皆寝るぞ」

健太さんが欠伸びながら言う。

「『スースー』」

皆既に道の上で寝ていた…

「健太さんどうします？」

「遥頑張ってな」

オレ夏美だけ持っていくから」

そう言って夏美さんをお姫様抱っこして行ってしまった。

「大家さ…」

もういなかった…

「相ざ…」

チ力を背負って行ってしまった。

結局オレ一人で

小暮さん

佑香ちゃん

七奈

を各自の部屋まで持ってた……

次の日

バイト休みでよかった

「一日中寝てられる」

「それはあかんと思うわ」

「チ力なんでここにいるの？」

「鍵あいてた」

だからって……

「んじゃー今日も一日頑張りましょう!!
なあ遙兄ちゃん!!」

（頑張るよ悟兄ちゃん）

第五笑 来客―騒動―光

六月上旬

「あつぢうしんどい」

誰もいない部屋で一人で喋ってた。

（ドンドン）

「はい」

誰だろう？

「よいしょ」

ドアを開けると小学生くらいの男の子が立っていた。

「どうしたのかな？」

しゃがんで聞いた。

「隠れさせて」

そう言って部屋に入ってた

「ちょっと待って」

「誰が来てもいないって答えてね」

何かしたんだろうか？

「わかったよ」

隠れんぼかな…

（ドンドン）

「はい」

また誰か来た…

佑香ちゃんだ。

「すみません小学生くらいの男の子こなかった？」

「来てないな」

って言えばいんだよね。

「そうすか失礼しました…」

「何かしたの？」

「なんでも……ない…です」なんかあったんだな…

佑香は探しに戻ってつた…

「さあて少年何したんだ？」

「お前には関係ないだろ」

気が強い子だな…

「兄弟喧嘩でもしたな？」

「兄弟じゃないし…」

佑香ちゃんに雰囲気そっくりだな

「そっかーじゃあいいや」

「しつこく聞かないのか？」

「どうせ答えないでしょ」

「まあそうだけど…」

「じゃあ聞いても意味ないじゃん」

「……お前…アホだな………」

「アホ言つな」

三十分後

(ドンドン)

また佑香ちゃんかな…

「遙」

健太さんか…

「なんですか？」

「かくしてくれ」

この人もか…

勝手に入る健太さん

「誰が来てもオレがいるって言っなよ」

「わかりました」

「サンキューな遙…
こいつ誰？」

そっいえばオレも名前知らねえな…

「少年Aです」

「川下隆です」

「オレは高岡健太
川下って子とは佑香の弟か？」

「違います」

仲良さそうなカンジだな〜

(ドンドン)

今日は来客が多いな…

「遙ちゃ〜ん」

「なんですか」

青空さんか。

「隠して〜」

この人もかよ…

「いいですよ」

「いや〜聞いてよ〜」

入ってきながら喋る青空さん

「健太がさ〜煙草吸ってさ〜約そ……
健太……」

ちよつとした修羅場かな……

「何でここにいんのよ?」

「お前が後から来たんだろ」

ここで喧嘩すんのかよ

「あの二人ともここで喧嘩は…」

「お前は

「遙ちゃんは

「出てくんない」

「はい……」

二人圧倒されるオレ。

「お前って弱いな」

どうしよう…喧嘩…ヤベ…な…け…

プチン

「ああああ!!」

「……」

「どうしたんだよ…いきなり…」

「……ワリイな少年」

「ごめんね遙ちゃん」

「すまんな遙」

何だろう…ボーツとする……

「どうしたんだ大きな声してんだけど…」

チ力か…

「何でもないよ」

「大きな…声…したけど……なんか？」

七奈…

「何でもないよ？」

「なんかしたのか？」

小暮さん…

「なんでもないです」

「本当にか？」

「本当です」

ちょっとだけ嘘をついた…

「ならいんだけどな………」

心配そうな小暮さん

オレは皆にことわってから外の空気を吸いに出た。

「何してんの？」

なんか声がする。

「誰？」

「あんた馬鹿にしてんの？目の前にいるじゃない」

目の前って言われてもオレの視界は真っ暗だ。

「佑香ちゃんかな」

「そうだけどさ……」

大丈夫？なんかおかしいよ」

「佑香ちゃんこそ
声に元気がないよ」

「そんなことないよ……」

そう言われると足音が遠くなっていた。

オレの目にも光がちょっとずつ入ってきた。

第六笑 少年―宝物―友達

「あつところで小学生くらいの男の子みませんでした?」

「オレの部屋にいるよ……あついないよ……」

「いるんですね……」

「やっと思つた……」

「そう言うアパートの中に入ってた。」

「言っちゃった……」

「まあいつか……」

「大丈夫?」

「誰かが後ろ」

「声をかけてきた。」

「一応大丈夫ですかね」

「なら……いんだけどね」

「七奈か……」

「七奈心配かけて悪いな……」

「ん……別に……」

そのときアパートから少年が走ってきた。

「遙く助ける！」

そう言ってオレに抱き付いてきた。

「どうした少年？」

「佑姉ちゃんが……」

佑香ちゃんが……？

「きたきた」

佑香ちゃんが走ってきた。

「男の子みませんでした？」

「んーオレの後ろかな」

「あっお前言うなよ！」

そういいながらオレの尻を殴る。

「隆もういいでしょ

返しなさい」

佑香ちゃん怒つてるな……

「やだね」

強気な少年。

「ああ」

興味なさげに欠伸する七奈。

「何したのさ？」

オレは喧嘩の理由を聞いてみた。

「あなたには関係ないです」

佑香ちゃんはハッキリ言うね

「こいつの宝物を隠したんだよ」

少年は口が軽いほうだな

「そんな…ことしちゃダメでしょ」

七奈が注意とは珍しいな

「うるさいな、関係ないだろ」

結局は関係ないって言葉ですんじやうのか…

「関係ないことない…」

友達が困ってんだから…助けたいと思うから」

七奈がこんなに喋るとはな

「うるせーな！！」

何が友達だ馬鹿！！」

少年は走っていった。

佑香ちゃんも少年を追いかけて走る。

「七奈行くぞ」

オレ達も後を追って走った。

第七笑 ……一遙より

佑香視点

あの馬鹿……

「まってよ〜」

なんで私必死になってるんだろう……

あっそつかアレのせいかな……

ああ〜メンドクサイな〜

「待って〜!!」

遥視点

「ハアハア……アイツら足はえ〜な」

アイツら足はやすぎんだよ。

「もう……走れない……」

七奈がコケた……

「いいよ

お前は戻ってろ」

七奈にそう言つとオレはまた走りだした。

「ったく〜しんどいな〜」

どこにいるんだかな…

「待つてゝ!!」

いた…

佑香だ…

「待ちなさいよー!!
隆!!」

体力あるな…二人とも…

「待つてよー二人とも」

叫んで見るものの追いつく気がしないな…

少年Aは見えないな…

「隆…待つて…よ…」

(ボタン)

「佑香!!」

佑香はその場に倒れこんだ。

「大丈夫か？」

「いいから…隆を…」

わかった。と佑香に向かって言うとオレは走りだした。はずだった…

「……佑香……手はなして……」

佑香はオレの服をつかんだままだった。

「私も…連れてって……」

「……？」

「私も連れてって！」

泣いてるんじゃないくらいの震えた声で言う。

「…わかったよ
ほら」

背中を差し出すオレ

「何やってんの？」

「連れてくんだろ乗れよ」

黙り込む佑香。

「少年Aが行っちゃうぞ」

「わかったよ」

舌打ちしながらオレにおぶさる。

「早く追いかけてよ」

佑香が呟く。

「わかってるっくの行くぞ」

佑香を背負って走り出した。

佑香視点

「急いでよ!」

「急いでるよ!」

私は今バカの背中にいる

コイツ意外に体力あんのね…

「少年A発見!」

後もう少し…

「ほら急いでよ!」

「わかってるわ!」

コイツはさらに速くなった。

何かいつもと違うな…

チ力見つけたのもコイツだっけ…

「少年A追いついた」

「うるさい!!」

声がしたら目につる全てがゆるれた。

遥

「少年A追いついた」

「うるさい!!」

やべっ!!足が……

少年Aに思い切り足を蹴られた…

「いつて……」

オレはバランスを崩した。

佑香が危ねえ!!

気付いたら何か真っ赤だった。

健太視点

アイツらどこいった？

「メンドイな…」

探してくるか…

ん…アレは七奈かな…？

「おい七奈アイツらどこ行った？」

「少年Aを追いかけてったよ」

隆のことが…

「どっちに行った？」

「あっち…」

川の方が…

めんどくせー

「七奈案内頼む」

「ハイ…」

三十分後…

いたか…

なんでアイツは佑香を背負ってんだ？

「お……………あつ」

「うるさい！！」

佑香が鉄の策に突っ込む！！
あぶねえ！！

（どがしゃん！！）

「遥！！」

オレは遥に駆け寄った。

「大丈夫か！！」

「…………… 大丈夫… 夫… です」

「佑香救急車呼べ！！」

お前と七奈は付き添いしてけ！！」

とりあえず混乱は避けれる…

「でも… 隆が…」

佑香は泣きそうな声で言う。

「あの馬鹿はオレが行く」

オレは隆が逃げた方へ走り出した。

？視点

アレ？どこだここ？

なんで目の前が赤いんだ？

ってかオレは誰だ？

なんにもわかんないけど…？

二人の女の子が泣いてるんじゃない…？

誰だよ？泣かしたの…

女の子は泣かすもんじゃなくて守るもんだろ…

ある人からの受け売りだけど…？…？…？…

ある人って誰だ…？…？

色んなこと思い出してきた…

オレのこと仲間のこと…思い出したくないことも…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5013h/>

笑わ荘

2010年10月9日01時47分発行